服部文庫
イ17
1247
2

117
1247
2

一 ざまの所まで乃事
一 こきう くん
一 おう くん
一 大なこん所をまでの支
一 大なこん じ 所よ乃ま
一 山口乃先つだう乃事
一 ちうぎん
一 そむ
一 ゆひくまうの所事
一 こひうを

一 くるひ
一 阿こゐまつ
一 こくたじ
一 せんくうじ
一 そとゝの所ゝ達

平家物語巻第二

治承元年五月五日てんさひのげと云ふさん
大そふ志ゆう公請ぜてうじ せう海うへくん
ご我はつかひまて如意輪の由かんぞんとめし
へして由志そふとりひ志させうもれいち志
ちゆうのはかひとはをてこんご神輿我御身へ有
なそすはう所とのちゆうがんと知されなりて此ふ
にざまの由ぞうの事ゆうあり國司師高こ達を
でうまいのあひだこその高くいにうつて大衆とめこ
らひそせうといてはうまでふの由大事にあらず

し一志ん三ぐさん乃きろ無くけふぜしこの事を
さげをらるはかりハしゆくそんの乃ふぞくそらなひ
こく乃先ゆゑびくそんぢくの乃まゑ志がさろより
志ごいにけりでんしきこまるときろのなさあ
にけづあらるさすがまがてきハそくけん風んちの
けるひぢらくせまろさひとつひなりてきぎんこれ
とふぞくしてかりへの乃ちとを志ほりけるや
こへかりけがるまきん心のさらこそこれける
などに山とんにて大流ゆろてせんぞもそもく
ぎ志ん見ゆ志ゆゑりはてこてんぐいの乃げもり

先て母ゑ代ふいろまそいまごけざい乃まひと
見かぎ御ゝく事の心後あんどろに志ん乃無く
のころほひくまてひとてひと後ゐて大沛ん
なり山によらの乃がろく四時の乃きがりを此所り
ひ詠め詠ひしりけてゑ志ゆのはよけんあ
とおして三千の浄侶居を白さりかんのまは一家
どく志年ゆりて少しとあはせしやのまひきん
ひあれなりの月志の事やけんまゑ志ゆ
のきがく大重の乃ゆゑろ明り此志ちい紀の
志いぐくもていとの紀りんにあらろてごてくれ

討せられ次男近衛をんぐすん師徳ごくよりひき
いざして六条がはらまでちらせられ乃ゆく薬
尉師平らうどう三人同くびとらまゐらせ
れ見れいひいなれをの乃ひいぞくい詠ふまじ紀
事にい詠ひあや曲ゐてんざひ乃産主ばざひ
小ゆこなひくすかうやはさふきん山まう大しぬん
ぞろ三ぞうどろとさらどころにかうむらへ如はう紀
紀まあ曲りをりまん大なごんれりちのさやうひと
すれうところ小ゆしこ紀ゐまゐ詠せあふなりはく
あれまこれもひどろ乃あゝ曲し事此をまこさ

あくまるふこそ左まをらしぬるんさぞ紀てかくみん
乃さむしいどを乃なるふぞあるむすど曲りし紀事
れふ詠んしはくまでい詠ひさりをうところふさし
詠乃ゑこゝりあしゆのさうふしをまもあれ
やまるいのちうしれりんとをの曲とを乃まいるに
こそと曲りひてまち詠ふところふされれくして入
詠ね國いさしれたるゆふ如ふなるし大なこんれお
りしをうさし詠乃志やうじはつとめをらまさる
そをん乃こ詠を此ゑしうるに志詠紀大くらせ
くれんひしは詠のゑれゆしくろ詠をてはれ

かつしどうにてもやありきむしんうぞ志ぬん
乃げもとぐぐぞんぞんそこ正じ山乃さ紀ゆりけん
さうにきろぐんして夏(げ)京(寄)こうして佛(かとけ)ゆ
花供(そなぐ)せし抱ごをなりさん祢んぎやうけんゆ
うして大京をを申しこをせをふるまひしが
世く面をのいくけふ折らぬだう京さうし
主(ぬ寄)此紀ひとそせひてうろせんをくまとそろすを
やかふちうどろせうけ面きうしくけふそうもん
志ぶをふ者き祢ふこれまゆそ入(ゆだう)相(あさ)岡(ふく)いん
せんを取て紀いの乃くふ此ぢうけん湯(あさ)浅ごんの

かうを世祢志を以下紀なひ乃けを抱二千よけん大
京ふけしそへて さう京をせ紀ゆ内だう京ひごろは
さう御うどうにありきろがこれを紀ひくめふを乃
くふ三ケ乃しやうに下(げ)うしまとこ此せひを
そろして又さうげんしてけう井坂ふ志やう
くまくをゆへくしそごるあひこ九月廿日ころ
乃一てんふ大寄三千人くらんぐん二千余(よ)人けうう
そのせひ五千余人けう井坂ふゆしうせて さ紀
をどろとそけくりきろさんどはけりさもとそゆりひ
けるふ大寄とくまんぐんをけさだそんとす くまん

あふいをどりふせゝ御ほさふそぶと大ぬ軍（あぐん）
はくゝ五十万騎とすきらるをとうん乃たゝひよ
りふして思ひもれ御ほ袖からふきり御ほ袖立
余人（よ）いけどりませゝ御そのゆに大ぬ軍そぶ
とりし先としてゝ六百卅余人（よ）とくりてゝし
いちくにこゝあしとさつてゆひたれつとなハ
ちしもうをのをありかとへてしめうをのを
ありそのゆにそぶハ一人忘せざりきりこゝけ
ゐ紀男とすつて山ふれがつてハ木乃ミをひろい
御とふいそゝハ称せりとほこ私ハ田西（たのき）乃ゆちがと

ひろいなどしてそ嚢（ほ）乃いれちとまどしきる
田ふいくゝをありきろうりどをそぶに見なきく
ゆそれ御りきまとしまきてハみなまゝがふろ御と人
うふをのぞうしとなつしゆふゆりふ事と一
筆うひてこゝきめひ無へてうんまゝに忘御せ
よといひて先てうり乃御ぐ御ほゆひ御きて
ぞとなちきろうひくしくを田西乃うり私を
うなもとうしちよりこやゝ人さうろ袖なきゆん
乃せうてハ忘ゆつまん忘んふ御あそびありしふ
夕御きゆそうとぐとりなふとなく袖あまき

乃屋をよりハ多九の面よりふえをとらるけとく
けてふうきハ一筆此をけそ。ちき二首乃言うき
を上代（ぞうだい）これハ曲づゞひ胡（ご）岡（あく）鬼（き）男（ふ）が詩（しま）けるひを
面ぞて世（よ）をしうをきとをとぜひハ出所しふ
せいなりけりとぞありしことごとをなり

平家物語巻第二